

第5回〈3.11以降〉読書会資料

「技術」について——「集積について」第一節（+α）より

*前回の読書会で読んだ箇所までに「技術」と、それが「集積」をもたらす様子について書かれてあったことは、『フクシマの後で』第二章「集積について」の第一節、第二節を読んでおくとより理解が進むと思ったので、できるかぎりまとめて（というより注釈をつけて?）みました。

- 「技術は自然を代補する。自然はなんらかの目的（家やベットののような）を保証するものではないのに対し、技術は自然を代替し、そして、その目的やその手段に対して自らを付け加えるというかたちでそれを補足する。」（p. 75）

「代補」とは、注によれば、「代替物」、「代わりのもの」という意味と同時に、「捕捉する」、「補う」という意味がある。この二重の関係を技術は自然に対してもつ。そして技術と自然との関係のこの二重性はつぎの二つの条件に支えられている。

- （1）「まず、自然はなんらかの特徴的な欠如を示さなければならず（たとえば、自然は避難する場所を提供できても、家を提供することはできない）」（p. 76）
- （2）「さらに技術は自然に対して自らを接合させることができなければならぬ（自然の資源や力を利用するというかたちで）」（同上）

たとえばヒトは居住したり、体を温めたりといった「自然によっては満たされない欲求」を持っている（一番目の条件に該当）。こうした欲求に従って立てられた「目的」（の達成）を自然は必ずしも保証しない。また、他方でヒトの発明した技術は、よく切れる石や火などのような利用できる資源を自然から見出している（二番目の条件に該当）。火はとくに象徴的である。それは雷雨や火山の爆発などから、自然から生じるが、体を温めるといった人間の欲求に適うためには、生じた火の保存、生産のための技術を人間が発明しなければならなかった。

このようにして、技術は自然と離れて存在するものではない。本性上自然とかかわっている。その意味で「技術は自然の外部からくるのではない」（p. 77）、「技術は自然のうちに自らの場を有しているのである」（同上）。

- 「自然とは自らの目的を自分自身で成就するものだと規定するならば、——技術を用いることができ、そして技術を必要とする動物〔ヒト〕はこの自然から生じるのだから——技術もまた、自然の目的の一つとして受けとられねばならない、ということだ。」（同上）

すると、自然が自分自身で発展、展開していくように——というよりも自然がまさにそのようだから——技術もまた自分自身で発展していくようになる。この過程をもたらすのは、技術の成果を条件とする新たな「期待」である。原初の段階において技術は自然の（ヒトにとっての）不足を補足するにとどまっている。しかし技術が自然に“加工”をくわえたその産物がまた新たな「期待」を生み出し、それに応えようとするようになるということが起こると、技術によってやがて比較的自立した、独自の秩序が構築されるようになり、それがまた新たな期待や要求に基づいて展開していく。

- 「技術とは、つねにいつそう分岐し、絡みあい、複合化する目的、いやむしろ、自分自身の構成をつねに再展開することをその特徴とするような目的を、複雑かつ際限なく構築するという、目的の構造化——あるいはお望みであれば、思想、文化、文明と言ってもよい——のことなのである。」（ p. 79 ）

たとえば、「音や映像や情報が、手で触れることのできる媒体を介することなく伝達されることによって、諸々の装置も生活様式も新たに配置しなおされる」（同上）ことが起こる。その場に居合わせなくとも会話が可能となることによって、たとえばコミュニケーションや人間関係のありかたは劇的にかわるだろう。携帯電話によって単に人々が離れていても連絡ができるようになるというだけではない。たとえ離れていても誰かからの連絡を待っている状態、連絡がきうる状態が 24 時間続くようになるのである。すると、24 時間連絡がつくはずなのに連絡がつかないような場合、それもまたひとつの応答になることになりうる（たとえば「あいつはおれのことを“シカト”している」などと）。このようにして携帯電話は 24 時間態勢のコミュニケーション、人間関係を人々に強いることになる。しかし突然の電話に応答を求められるような人間関係は——少なくとも筆者にとっては——“うざい”。だからコミュニケーションの形態は、電話からメール、SNS から Twitter、Line へと変遷していったのだとも考えられる。つまりその都度のサービス形態を条件としてあらたな“うざさ”が生じ、それを避けたいという欲求、その解消という目的が生まれ、そして次の段階には、その目的に応じた新たなサービスが開発、提供されるという連鎖が生じているのだとも考えられる。これはコミュニケーションにかかわるサービスだけでなく、サービス全般に当てはまるかもしれない。

あるいは、胎児の染色体異常を事前に調べる「出生前診断」への欲求も、それが可能になる技術が生み出される以前には持たれることもなかっただろう。しかもいま本格的な議論の俎上に載っているのは主にダウン症の出生前診断だが、その議論が落ち着き制度が整った後には、性別や子どもの“才能”にかかわる DNA を出生前に診断する欲望も（より現実的な仕方です）生まれるだろう。

- 「この段階では、目的と手段はたえず役割を入れ替える。技術が展開する全般的体制のもとでは、目的が発明されるとしても、この目的そのものが手段という観点で思考されることになり（不妊症をいかに乗り越えるか、動画をいかに送信するか）、さらに手段が発明されるとしても今度はこれ自体が目的と同等のものとなる（長生きするのは良いことだ、貨幣がいつその貨幣をもたらすのは良いことだ）。」（p. 79-80）

もとは不妊症の治療が目的であったにもかかわらず、それを「いかにして」行うかという観点が入るときには、治療の効率化、短期化が目的としてとって代わって、それに対して不妊治療は手段になりさがっている。また、ある薬に重い副作用があることが認められながら、あるいはその可能性を追求しないまま、その薬が市場に流通してしまうのは、薬の担う治療という目的が利益追求などの他の目的にとって代わられてしまったからだといえる。他方で貨幣は、商品交換のいち「手段」であったにもかかわらず、いまやそれを増やすこと自体（“経済効果”自体）が目的となっている場面は往々にしてある。

目的と手段が絶え間なく入れ替わるという事態は、目的への問い（何になるのか？）、そのもののアイデンティティへの問い（～とは何か？）を必然的に招くことになる。芸術という技術にかんしてもそうである。芸術は作品をつくり上げるためにあらゆる手段を講じながら同時に、「芸術が何になるのか？」という「目的性への問いかけの特権的な領域」となりうるものであり、また「芸術とは何か？何の役に立つのか？」というアイデンティティへの疑念にもさらされうる。

目的やアイデンティティへの問いかけを「脱構築」の試みと呼べるとすれば、つぎの箇所を理解することも可能になるだろう。

- 「こうして、構築と脱構築とが緊密なかたちで相互に帰属しあうようになる。目的と手段という論理によって構築されたものは、極限において脱構築される。この極限では、目的は目的なきものとして現れ、手段のほうは、新たな構築の可能性を生み出す一時的な目的として現れることになるのだ。」（p. 80）

この「脱構築」は——もとはといえばハイデガーが「破壊（Destruktion）」と呼んだもののグラネルとデリダによる仏語訳であるが——「再 - 構築」ではない（p. 89）。そうではなく、ナンシーは「構築と破壊を超えて賭けられているもの、それは集積（strucion）そのものである」という（同上）。

- 「Struo は『よせ集めること』、『積み重ねること』を意味する。ここでまさに問題となるのは、構築＝共に - 積み重ねること（con-struction）や教育＝内に - 積み重ねること（instruction）が含んでいる秩序化や組織化ではなく、堆積であり、集め合せることなき集合である。もちろんここには隣接、共存関係があるのだが、とはいえ連係秩序を欠いた関係である。」（同上）